

□ 「ものがたりの授業」とは □

本校では、「ものがたりの授業」を次のように定義しています。

「ものがたりの授業」

他者との語り合いの中で、学んだことを過去の経験と関係づけ、学ぶことの意味や価値を実感し、未来につながる自己のよりよい生き方を見出していく授業のこと。

では、どのようにすれば各教科でこのような授業になるのでしょうか。

これまで、本校研究では、様々なアプローチから手立てを講じ「ものがたりの授業」づくりを提案してきました。

今期は、授業で扱った題材に対する「ものがたり」の変容を、自己との関連の中で見つめ直し、自分にとっての意味づけや価値づけを語り直すことで、学んだことの意味や価値の実感につながることを「ものがたりの授業」づくりの柱としました。



そして、題材に対する「ものがたり」とは別に、題材と自己との関連を意識した「ものがたり」を「自己に引きつけた語り」として、以下のように定義しました。

「自己に引きつけた語り」

「語る」行為の中でも、特に出来事（題材）と自己との関連を見つめ、時間軸の中でそれを筋立て、その出来事の自分にとっての意味づけや価値づけをする主体的な行為。

このような「自己に引きつけた語り」が、各教科の授業を通して生み出されていくと、教科で学んだことが自分を変えていく経験につながっていきます。そして、そのような経験を繰り返していくことで、生徒は学ぶことの意味や価値を実感し、生涯にわたって学び続ける「自立した学習者」に育っていくと考えていま

す。

「自己に引きつけた語り」を生む「ものがたりの授業」にしていくために、今期は、以下の3点に重点を置いて実践研究を進めています。

- 1 題材に対する「ものがたり」の変容の明確化
- 2 語り合い、探究する学びの過程
- 3 「自己に引きつけた語り」を促すための手立て

以下、それぞれについて説明します。

1 題材に対する「ものがたり」の変容の明確化

子どもの「当たり前」を捉え、その変容を構想する

そもそも授業とは本来、子どもの「当たり前」を変容させていくことをねらいとして実践するものではないでしょうか。

その際に、まず重要となるのが、子どもの「当たり前」を捉えることです。しかし、子どもの「当たり前」を捉えることは簡単ではありません。なぜなら、もっている知識や技能、経験、考えなどが異なっており、教師は子どもの文脈をなかなか把握できないからです。

そこで、時間はかかりますが、授業前のアンケートや毎時間の授業の振り返りの記述、授業中の生徒の発言や質問、授業後の聞き取りなどを通して、生徒はどう考えたのか、どこに興味・関心や疑問をもち、どこでつまづいているのかを見取り、その実態から生徒の思考を把握していきます。それを地道に繰り返していくことで、はじめて、「子どもたちはそう捉えていたのか。」といった子どもの「当たり前」にたどりつきます。

- 1 子どもの「当たり前」とは、子どもがこれまで経験したり、学んだりしたことをもとに形成された、題材に対してもっている考えのこと。題材に対して「興味・関心をもていない」とか「知らない」「考えたことがない」といった状況は、子どもの現状ではありますが、子どもの「当たり前」は形成されていないと考えます。



これまで本校では、「ものがたりの授業」づくりにおいて、個の文脈を把握することの重要性を提案してきました²。今期は、生徒の学習前の個の文脈を把握した上で、授業者がそれをどう変容させたいのかを明確化することを重視しました。「当たり前」は、個の文脈にもとづいて形成された題材に対する考えであり、子どものもつ素朴概念やそれまでの既習事項、自己の生活経験などをもとに構成され、「ものがたり」として表出されます。その「ものがたり」として表出される子どもの「当たり前」が教科の学びを通して書き換わってこそ、意味や価値の実感を伴う「自己に引きつけた語り」につながると考えています。

2 「多様な個の文脈を取り上げ、すり合わせる場を設けることで、一人一人の考える力が活用されることになる。したがって、終末には…自分なりの筋道だった考えに到達し、実感を伴う深い理解が生まれる。…まさに、個の文脈に着目することは、生徒がどのように学んでいくか一人一人の学びの過程を把握することになるので、質の高い知識を構成するための授業設計にも欠かせない。」(本校『研究紀要』2016、9-10頁)

2 語り合い、探究する学びの過程

語り合い、探究する生徒主体の学びの過程が
「自己に引きつけた語り」につながる

「自己に引きつけた語り」を生み出すためには、何が必要でしょうか。それは、学びが生徒主体のものになることだと考えています。例えば、学びが教師主導になるとどうでしょうか。ともすれば、そこで学んだ内容は教師から与えられたものになるため、実感をともなった深い理解は得られず、自分にとっての意味や価値を見出す「自己に引きつけた語り」は生まれにくいと考えています。「自己に引きつけた語り」を生み出すためには、自ら課題に向き合い、思考を巡らせ、自己や他者に問い、挑戦や失敗を繰り返しながら、学んだことを自分のものにしていく生徒主体の学びにしていくことが大切です。

そういった生徒主体の学びにするために、今期、本校で重視しているのが、語り合い、探究する学びの過程です。

生徒は「語る」ことによって、自分の中に知識を構成していき



ます³。そして、その知識を構成する筋立てに個性が生まれま
す。語り手によって構成された知識を、異なる筋立ての他者と問
い合い、語り合うことで、互いに再構成していくのです⁴。つま
り、語り合うことで生徒は学びを深め、自分のものとしていくこ
とができるのです。

また、語り合うことは、探究する学びの過程として行われるこ
とが重要です。なぜなら、語り合うこと自体が目的化してしまう
と、生徒同士のすり合い（吟味する、最適解を導く、合意形成す
る、など）が行われにくく、学びが深まらないからです。

語り合い、探究する学びの過程として本校で重視しているの
は次の3点です。

- ① 課題（問い）が生徒のものになっていること
- ② 課題追究の方法が生徒のものになっていること
- ③ 根拠にもとづいて語り合い、問い合えること

上記の3点を満たす、語り合い、探究する学びの過程を踏むこ
とによって、学びは生徒主体のものになっていきます。そして、
学びが受け身のものではなく、自ら主体的に獲得したものにな
ってこそ、学んだことと自己との関連がより強く結びつき、「自
己に引きつけた語り」につながっていくと考えています。

3 「自己に引きつけた語り」を促すための手立て

題材と自己とをつなぐ概念を設定する

1、2の手立てで生まれた題材に対する「ものがたり」の変容
は、教科内容の枠内の「ものがたり」の変容であり、自分との関
連が見出せず、学んだことの意味や価値の実感には至らないケ

3 社会構成主義の学習観にもとづいています。

4 「ものがたり」は、語り手と聴き手の共同行為によって生まれ、語り合うことによって絶えず再構成される。（本校『研究紀要』2014、2016、2018より）



ースもあります。したがって、題材に対する「ものがたり」の変容を、自己との関連の中で見つめ直し、「自己に引きつけて語る」ことが重要になります。

では、どのようにすれば生徒は題材に対する「ものがたり」の変容を「自己に引きつけて語る」のでしょうか。

例えば、教科の学びを子どもたちとつなげるために、学んだことが日常生活のどこで使われているか、実社会でどのように役立っているかを取り上げることがあります。しかし、学んだことを自己と関連の少ない日常生活や実社会と関連づけるだけでは、自分自身や自分をとりまく世界の見え方、感じ方の変容にはつながらず、学んだことの意味や価値を実感しにくいと考えます³。

そこで、今期、取り組んでいるのが、題材と自己とをつなぐ概念⁴を設定することです⁵。概念の設定の際には、以下の2点を満たすことを大切にしています。

① 教科を学ぶ意義につながるものであること

② 題材の学びから、自分や自分をとりまく世界の見え方・感じ方に転用できるものであること

上記の2点を踏まえた、題材と自己とをつなぐ概念を設定するためには、授業者が「その教科や題材を学ぶ意義は何か」「題材を通して学習者自身をどう変えたいのか」といった教科内容を通じた教育内容についての授業者なりの考えをもつことが必要になってきます。

現在は、授業者が授業構想の段階で上記の2点を満たす概念を設定し、単元構成や振り返りの視点に取り入れることで、「自己に引きつけた語り」を促す手立てとしています。

3 例えば、理科の大気圧の学習を、日常生活における圧力鍋の原理とつなげても、圧力鍋に対する知識は増えますが、自分をとりまいている自然界の見え方や感じ方が変わる感動はあるでしょうか。

4 ここでは特に、題材の枠を越えて、他に転用できる性質を取り出した考え方のことをさします。

5 教師が設定した概念で「自己に引きつけた語り」を書かなければいけないということではありません。



上記1～3の重点内容を含めた「ものがたりの授業」の構造図は、以下のようになります。

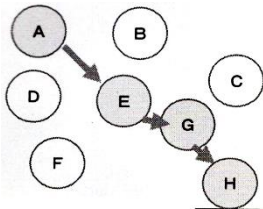
「ものがたりの授業」

● 題材 (社会：古代倭国の律令化) に対する「ものがたり」の変容

手立て1

(学習前)

題材に対する個の当たり前
(例) 古代倭国は、「唐」から進んだ制度や文化を学んで、大宝律令を制定し、律令国家となった。



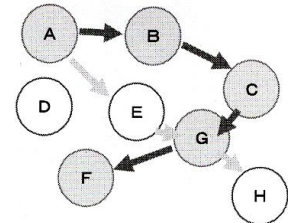
「当たり前」からのズレ

語り合い探究する

手立て2

(学習後)

(例) 古代倭国は、厳しい国際情勢の中で「唐」に従属せず、朝鮮の国々からも文化を取り入れるなど、したたかな外交戦略で律令国家となった。



教科として深まる変容 (教科目標につながる変容)

概念：「日本の独立」

手立て3

題材と自己とをつなぐ概念の設定

- ① 教科を学ぶ意義につながる概念であること
- ② 題材の学びから、自分や自分をとりまく世界の見え方・感じ方に転用できる概念であること

● 「自己に引きつけた語り」

学習前は、日本が独立していることは当然のことで、その独立が1300年以上続いていると知っても、「すごいのかな」とは思ったが、「そうなんだ」以上の感情はわかかなかった。学習後は、日本が独立していることは当然のことではなく、国際社会の複雑に変化する勢力関係の中で、1300年間、先人が努力して維持してきたことだった。自分が大人になったときの未来の日本の独立を、自分たち世代も維持していきたい。

自分自身や自分をとりまく世界の見え方、感じ方の変容 (教育目標につながる変容)